

「森と人をつなぐ」場づくり

ー森林環境教育の視点からー

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 山崎 葉子

1. 研究背景

森は資源、水や酸素の供給、そして自然環境の保全や公益的機能の観点からも人間にとって重要な存在である。森を擁する山村には人と自然が共存してきた知恵と技術が息づく豊かな文化が残っている。

しかし森と山村には魅力だけでなく多くの課題もあり、山の問題は山側だけで解決できないことははっきりしている。手入れの生き届かない森、林産業の不振、深刻な獣害、これらは人口減少と後継者不足に起因する課題も多い。山村に人が少ないことが課題なら、人を外部から増やし、内部から減らさない取り組みが必要だ。

けれど現代の生活様式は森と縁遠く、多くの人（まち・山村に居住する人を問わず）森と山村について知る機会が少ない。山村に人が訪れ、また住み続けるにはまず森と山村について知ってもらうことと、その機会をつくる必要がある。

2. 研究の目的と手法

森と山村を知り、縁遠くなった森と人をつなぐ機会を創るために、必要な場づくりの要素を明らかにする。その上で次の3点について調査・実践を行った。

1. 場づくりの調査とエッセンスの抽出
2. 場づくりの実践
3. 「森と人をつなぐ」活動のヒアリング

3. 実践と結果

3-1 場づくりの調査とエッセンスの抽出

調査にあたって、森や山村に関係する講座やワークショップ、対話を目的とした会合等に本年度70回以上参加した。その際、場づくりのデザインを行う目的をもって、森林環境教育で学んだ「インタープリテーション（伝えたいことを効果的に伝える技術）」「ファシリテーション（会議やワークショップを円滑に進める技術）」の視点をもって参加した。これらから有効な「場づくりのエッセンス」を収集、分析した。考察の結果、良質な場づくりには次の3要素が共通しており、特に重要であることが分かった。

- 1) **全体のデザイン**: 大きな要素は、進行（スケジュール、説明、タイムキープ、会場、人数）と内容（テーマ、体験内容）である。
- 2) **伝えたいことを効果的に伝える力**: 主催者の

技術、姿勢、熱量が参加者の満足度に影響する。

3) **精神的な安全性の確保**: 参加者の心の動きに寄り添った主催者の在り方で「安心安全」「居心地の良さ」「温かな雰囲気」を創る。

3-2 場づくりの実践

前項目の3要素を基に、3つのテーマで場づくりを実践した。

ケース1: 初対面でも話しやすい場づくり

2023年5月20日・21日に山梨県北杜市で行われた「清里オーガニックキャンプ」内で実施した。簡易的な小空間を創り、初対面同士でも対話ができる促しを行った。

居心地の良さには物理的・精神的な快適性や安心感が必要である。また「話す・聞く」のバランスと話者が受容されている雰囲気、発言が気楽にできる軽やかな空気感が場に必要であった。一方で良好な関係を築くためには、配慮が行き届く適正な人数もあることがわかった。

ケース2: 活発に意見が出る場づくり

2023年5月14日に愛知県豊田市で行われた「矢森協（矢作川水系森林ボランティア協議会）安全車座ミーティング」において実施した。主催者と事前打ち合わせを行い「主催者の意図を汲み、主催者に寄り添った参加者」として場に参加し、活発に意見が出る場を作ることを期待された。そのために一参加者ではあるが、ファシリテーター的視点を持ってアプローチを行った。

具体的には「名前を呼びあう関係性づくり」「発言を誘発する働きかけ」「緊張緩和のための茶、菓子の提供」などを行った。特に意識したのは「場と仲間を信じる」「ポジティブな心構えで物事をみる」といった視点の転換であった。

終了後、主催者からは「より活発な意見交換が行われ、効果的であった」と評価を得た。

ケース3: 食卓を通じた場づくり

2022年から学内で通算30回以上実施した「森の食堂」では、授業が忙しくて途絶えがちな学生間の交流を促進するために皆で食卓を囲むゆるやかな交流の場を設計した。

ケース1、2の試行と異なりテーマは設けず、主催者の積極的な介入のない自由で対等な場とした。それにより回数を重ねるうちに自然と協力者

ができ、自主的な関わりを持つ人が増えた。場づくりに重要である「居心地の良さ」や「温かな雰囲気」を生み出す場として特に有効であった。

3つのアプローチから、どの場づくりにおいても重要だったのは、主催者の相手を受容する姿勢や、相手を「よく見る・よく聴く」、相手に「寄り添う」「気を配る」、そして相手を「大切に扱う」在り方であった。主催者の働きかけで、参加者は受容されていると感じ、安心感や肯定感を持つことができる。それにより「アットホームな場」ができる。ここでいうアットホームとは共同の目的や経験を通して、共感と理解、信頼と安心感を深め、個が尊重される状態を指している。アットホームな場は参加者の自主的な参加と、主体的な発言や行動を促す。

3-3 「森と人をつなぐ」活動のヒアリング

豊田市では森林間伐ボランティアの活動が盛んである。そこには2006年から始まった「とよた森林学校」の役割が大きく、これまで約400名の講座参加者と24のボランティアチームが発足した実績がある。

豊田市における「森と人をつなぐ」活動のこれからについて方向性を探るべく、これまで活動を牽引してきた方々や組織にヒアリングを行った。今回取り上げるのは「とよた森林学校」の活動に初期から中心的な役割を担ってきた山本薫久氏（とよた森林学校 講師）、丹羽健司氏（元・矢森協代表）である。

山本氏は人づくりや仲間づくりに長け、丹羽氏は仕組み作りと市民を巻き込んで世論を創ることに長けている。同志である二人からは、山仕事の師匠である島崎洋路氏から受け継がれた「自己決定の尊重」という心構えがあった。ヒアリングから見えたのは「仲間づくり」の重要性と、個々人の自主的な参加や主体的な活動を担保するために必要な「自治」「自由」「対等な関係性」の構築であった。

森に関わるという選択が自主的・主体的なものであるためにそれらは必要であり、想いを持った人同士がつながり、互いに認め合うことにもつながった。

こうした森と人をつなぐできた人たちが示していたのは「森と人がつながるには、森につながっている人同士がつながる——人と人がつながることが大切である」ということだった。

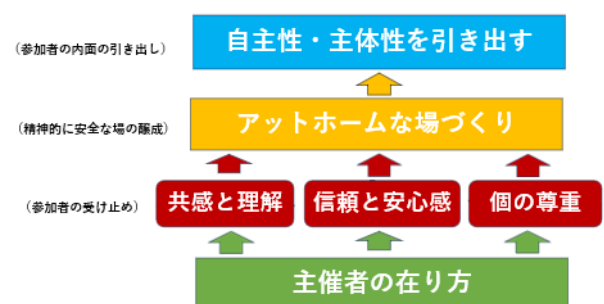
人づくり、仲間づくり、関係性づくり——森と人をつなぐでいく主体的な実践者として受け継ぎたい大切な「バトン」である。

4. まとめ

森と人をつなぐことを目的とした場づくりでは、参加者の自主性・主体性を引き出すことが望まれる。そのためには、参加者の個が尊重されることが必要であ

る。主催者は参加する人同士の対等な関係性を大切に、それにより協力や協働を育てていく。すなわち森と人をつなぐためには、まず人と人につながることが大切であり、人と人の良質な関係を生み出すには「アットホームな場づくり」が特に重要であることが本研究で分かった。

そして「アットホームな場づくり」を生み出すのは、場をつくる主催者自身の在り方である。具体的には、ファシリテーター的視点の持ち方に加え、場の力を活用し参加者を信じることで、そして緩やかな関係性を保つことが特に重要である。研究からは、場づくりにおいては主催者の生き方を含めた在り方が参加者の経験に大きく影響することが明らかになった。



森と人をつなぐ場づくりには内容の幅と深度設定をもった2つの関わり方を提案したい。それは「種まき」と「結い直し」である。

「種まき」では、今まで森や山村に縁のなかった人に体験や学びから森や山村について知ってもらおう。それは自分の暮らし方を考えるきっかけや、人が森につながる「入り口」となる。そして「結い直し」では、すでに森とつながった人がこの先も自身の人生を通して森に関わり続けられるようにすることである。

森とつながる人が増えることで山村に関わる人が増え、そして山村にとどまる人も増えることにつながっていくだろう。豊田市においてはすでに様々なプログラムがあるが、活動している人同士をつなぎながら次の活動を生み出すための「アットホームな場」はより求められていくであろう。

5. 今後の活動

豊田の森で受け継がれてきた、個人の想いを大切に皆が集まって活動するスタンスを次の世代に繋いでいくため「とよた森林学校」と「山里ひとなる塾」の運営スタッフとして活動予定である。

個人としては豊田市の山村に住み、暮らしを通して自身と森の関係を「結い直し」ながら、森と人、人と人がつながる一つのモデルを創りたいと思っている。

その第1段として、3月にアットホームな場として「倉庫解体WS」を開催予定である。